

図 3.8: 純資産がゼロのケース

一方、図 3.9 のように A さんに貸している額が B さんから借りている額を上回るならば、A さんからの返済をそのまま B さんへの返済に回しても、なお A さんから返済を受けることになります。この意味で、**債務を上回る資産の部分こそが純粋な意味での資産**とすることができます。同様に、仮に日本が外国から多額の借金をしていたとしても、同時にそれに等しい貸出をしていれば、実質的には借金をしていないのと同じです。従って、国の場合も、重要なのは対外資産・債務それぞれ単独の大きさではなく、両者の差である対外純資産の大きさということになります。

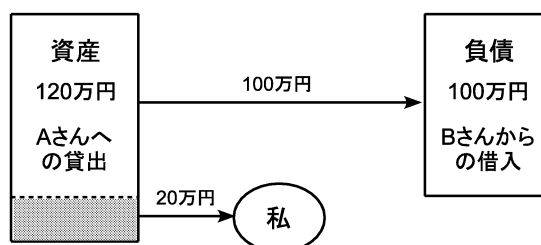


図 3.9: 純資産が正のケース

さて、ここで対外純資産が1年間でどれだけ増えたか、すなわち純資産の「増分」を考えてみましょう。今年増えた資産から今年増えた負債をマイナスすれば、まさに対外純資産の増分が求められます。

$$\text{対外純資産の増分} = \text{対外資産の増分} - \text{対外負債の増分}$$

ところで、表 3.4 で見たように、資本勘定および公的外貨準備の貸方は、対外債務の増加分と対外資産の減少分、すなわち**対外純資産を減少させる取引**を表しています。一方で、借方のほうは、対外債務の減少分と対外資産の増加分、すなわち**対外純資産を増加させる取引**を表しています。したがって、借方から貸方を差し引いたものは対外純資産の増加分を表すことになります。

$$\begin{aligned}
 \text{資本勘定・外貨準備の借方－貸方} &= (\text{対外資産増} + \text{対外債務減}) - (\text{対外債務増} + \text{対外資産減}) \\
 &= (\text{対外資産増} - \text{対外資産減}) - (\text{対外債務増} - \text{対外債務減}) \\
 &= \text{対外資産の増加} - \text{対外債務の増加} \\
 &= \text{対外純資産の増加}
 \end{aligned}$$

ところで、この式の左辺「資本勘定・外貨準備の借方－貸方」は、資本収支と外貨準備増減にマイナスの符号をつけたものに他なりません。したがって、さらに以下のように書き換えることができます。

$$-(\text{資本収支} + \text{公的外貨準備増減}) = \text{対外純資産の増加}$$

この式は、資本収支と外貨準備増減の**赤字分**だけ対外純資産が増えることを表しています。たとえば、資本収支が-100で外貨準備増減が50（したがって資本収支と外貨準備増減の合計は赤字）ならば、対外純資産の増分は両者の合計にマイナスをつけて $-(-50)=+50$ （つまり50の**増加**）となります。逆に、資本収支が+100で外貨準備増減が-50（したがって資本収支と外貨準備増減の合計は黒字）ならば、対外純資産の増分は $-(+50)=-50$ （つまり50の**減少**）となります。

$$\text{対外純資産の増分} = -(\text{資本収支} + \text{公的外貨準備増減}) \quad (3.4)$$

さらに、「対外純資産の増分 = $-(\text{資本収支} + \text{公的外貨準備増減})$ 」という関係を国際収支の中で見てみると、**経常収支**と対外純資産の増分とが表裏の関係にあることがわかります。すなわち、「3つの収支の合計は常にゼロになる」という関係を利用すれば、経常収支と資本収支・外貨準備増減の間に以下の関係を導くことができます。

$$\begin{aligned}
 \text{経常収支} + \text{資本収支} + \text{外貨準備増減} &= 0 \\
 \text{経常収支} &= -(\text{資本収支} + \text{外貨準備増減}) \quad (3.5)
 \end{aligned}$$

最後の行の右辺は、(3.4)式が示すようにまさに対外純資産の増分そのものです。したがって、(3.4)式と(3.5)式を併せると、経常収支と対外純資産の増減の間に次の関係があることがわかります。

$$\text{対外純資産の増分} = \text{経常収支}$$

この式から、ある年の経常収支の黒字・赤字がその年の対外純資産にどのような変化をもたらすかがわかります。

$$\begin{aligned}
 \text{経常収支の黒字} &\implies \text{対外純資産の増加} \\
 \text{経常収支の赤字} &\implies \text{対外純資産の減少}
 \end{aligned}$$

各国は経常収支の黒字分だけ対外純資産を増やし、経常収支の赤字分だけ対外純資産を減らしているのです。これは、直観的には次のように考えれば理解できるでしょう。す

なわち、ある1年の日本の輸出が輸入を上回った場合、同額分までは物々交換でお金が動く必要はありませんが、超過分だけは現金や預金等の「金融資産」が日本にもたらされることで取引が決済されます。これはまさに、対外資産が純額で増えるということです。逆に、日本の輸入が輸出を上回る場合、その超過分だけは金融資産を純額で引き渡すことで決済しなければならず、対外純資産を減らすことになるのです。さらにくだけた言い方をすれば、次のようになるでしょう。すなわち、輸出が輸入を上回る分は外国への「貸し」なので対外純資産を増やすことになり、輸入が上回る場合にはその分が外国からの「借り」となり、対外純「債務」を増やす、つまり対外純資産を減らすこととなります。

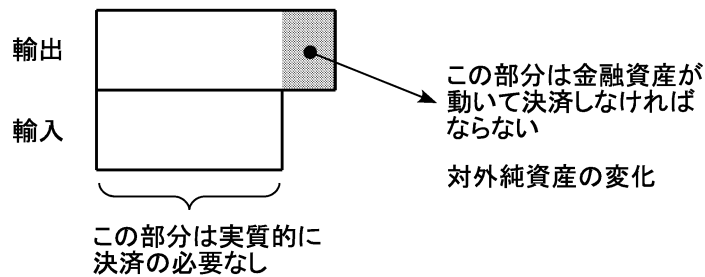


図 3.10: 経常黒字と対外純資産

ここで、「製品・サービスの取引とは関係なく外国と資産の売買をすることもあるのだから、経常収支が均衡していたって対外純資産の増減は生じるのではないか」と思う人もいるかもしれません。しかし例2で見たように、純粋な資産の取引は単なる資産の交換に過ぎず、資本取引の貸方と借方を同時に増やすため、純資産の額には影響を与えないのです。